

見当たらぬ。

第九次東三河郷開拓団の末路

愛知県 夏目 安男

昭和十五年九月私が十歳の時、愛知県南設楽郡より父に連れられて母と妹家族四人で渡満しました。龍江省甘南県太平山村三合屯第九次東三河開拓団です。

そこは広く淋しい荒野で、シベリアおろしの冷たい風が枯れ草をなびかせていました。

はるか遠くには、開拓団の部落が点在して見えた。日本では思っていたような花咲く楽土の広野でなく、ところどころには水がたまつた沼があり、遠い道を馬車の後について何時間も歩いて夕日の沈む頃に、土盛の塀に囲まれた部落につきました。

そこには、粗末な服装をした原住民の人達がいた。家は草屋根の泥壁で部屋の中は日本の古新聞を壁と天井に貼ってあった。

さて、私たちの同志が満州国開拓団として極寒地に農業開拓の鋤を打ち振るって活動し、ようやく開拓も順調に進み始め、大地に根づいた生活の第一歩を踏み出し、これから飛躍できて、年一年とみのりある生活が保証され、一家団らんが現実のものとなりつつあるとき、日本は一敗地にまみれ、世界の国々に対して無条件降伏という世にも無念な敗戦を味あわねばならなかったのです。敗戦後の満州の地で、私たち開拓団の家族の悲惨さはこの世の地獄絵図さながらで、目をおおうばかりでありました。

終戦直前まで、男という男はほとんど軍人として召集され、残された者は、老人と幼児子どもを抱えた婦人ばかりでした。侵略国の日本人集団としてわれわれは残された。

銃器が手元にある間はまだ土匪賊の襲撃はありませんでしたが、中国公安隊自治委員会等によって銃器を没収された後は、朝に夕べに夜には土匪、匪賊の跳りようまかせ、なんの策もないありさまで、そのうえソ連兵の侵入と、ともに平和であった日本居住地は無頼の広野と化

し、居住地を追われて着る物もなく食料も金もなく、無一物で西に東に流浪の旅に立つよりはかにないという窮地になりました。それは言葉では言い表すことができないくらいことでした。

私たちは、二十年十月には、第二の故郷と定めて五百余人の村作りの根を下ろしていた三合屯の開拓地を明け渡して、二十キロ離れた熊本県出身の東洋開拓団に合流し、お世話になりました。

各人が鹵を食いしばって故国引揚げまでをなんとかして生き抜こうと頑張っていたのですが、衣類が無く、食料も無く、病気になっても薬はありません。このようにときに発疹チフスのまん延に、ほどこすすべもなく、この間に老年、幼児を始めとして多くの団員家族達が何があんでも日本への引揚げまでは生き抜くのだと必死の叫びをあげながら、次から次へと死出の旅路へ立つのでした。

周回皆敵の中に生きる日本人の哀れにも悲しい諦めの人生行路でした。それでも私たちは絶対無抵抗主義に徹して、冷静に中国の終戦後の大混乱時期を見つめていき

ました。

私たちは、昭和二十年末日本へ引揚げてきましたが、一般の引揚者とは違い、渡満時、日本にある財産の処分をして家族ぐるみの渡満でした。日本に帰ってきてもまったく拠点が無く、寄りかかる何物もたないという人達がほとんどであって、困難をきわめるものでした。

扎蘭屯逃避行

愛知県 大原 芳 鐘

ソ満国境満州里にいたる興安嶺山麓の扎蘭屯の満拓公社で終戦の詔勅放送を聞く。

八月十日頃、扎蘭屯にも満州里、免渡河、等の奥地の軍や、鉄道関係の家族が避難してきて、官舎や社宅等に分宿していましたが、二、三泊してハルビン、新京方面に南下しました。

その頃、鉄道関係から満拓にも「避難しませんか」という誘いがありましたが、開拓団を置いて自分たちだけ